

半纏デザインのコンセプト

天衢會の由来をもとに、新たに半纏を制作しました。

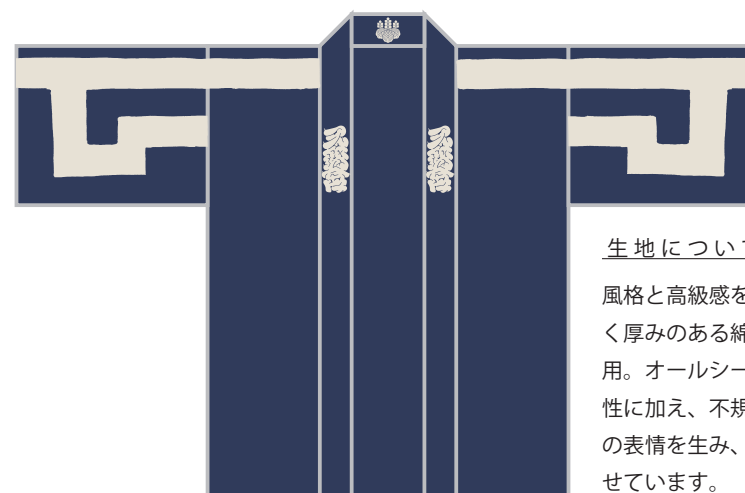
〈「八」は“多く”を意味し、「衢（ちまた）」は“道が交差し、分かれる場所”のこと。〉その言葉から、半纏をまとい交差点を進む神輿会の姿が思い浮かびました。

多様な性別や世代、価値観を持つ人々が神輿会を通して出会い、それぞれの過去に想いを馳せながら未来を見据え、今この神輿を担ぎ、紡いでいく。その皆さんが身につける半纏はどういうものが良いのだろう。

これらを受け止めることのできる表現のヒントを、本州アイヌの玄関口でもあったこの地の歴史から学ぶことにしました。宝暦九年（1759）に奉納された「熊を射る図」がアイヌ風俗絵師・小玉貞良によるものであったことから、その文化が確かに息づいていたことがうかがえます。（現在掲げられているものは、戦災で焼失後、復元されたものです。）

多様な人々や価値観が出会い、交わり、境界を越えて新しいつながりが生まれる場所。それは、天と地、過去と未来をつなぐ“道の交差点”のような存在です。そうした歴史の重なりに学び、アイヌ文様の特徴を紐解きながら、多様な交差点が点在する“道”のようなデザインとしました。

背には天衢會の「天」を据え、その周囲に八衢の「八」を忍ばせています。古くも新しい価値が生まれていく未来においても、この半纏が自然に馴染み、世代を越えて受け継がれる大切な晴れ着となることを願っています。



生地について

風格と高級感を備えた、ほどよく厚みのある綿スラブ生地を採用。オールシーズン使える実用性に加え、不規則な横畝が独特の表情を生み、和の趣をまとうせています。



配色について

綿本来の色味を活かした生成りを基調に、藍色とのコントラストが映える配色。自然のままの風合いが感じられ、素朴でありながら凛とした美しさを持つ佇まいを目指しました。